三州旅

白冊子

へ 5
4462
1

世之事ニ伎ヲ藝ノ者。樹黨遂ニ派。
仕勢諸短。因ニ諸門ニ入者噫可
歎矣哉。諸歌者添水注ヽ病諸。
夫人病勢則譫語。掌壓心而
睡必魘。或倫溝壑或没波濤。
恠追鬼捕。諸般苦辛。一為傍人ノ
所嘲解。諸芸如洗蓋樹黨諸短
者無未解。魘未覺焉耳。斯書
也。蕉翁之遺言。而土芳係筆

へ5
4462
1-3
門へ5
4462
巻1
昭和九年
十月一日

記蘭更梓以于世後為祝融
自所集人以茲新剞劂功成焉
其言叮嚀精詣實可彼喚醒
病獗與獻兎者而能洗諸苦也矣

享和改元之春　生〻亭瑞馬撰書

三冊子序

芭地人乃三冊子を編集して名を生涯
連綿の三冊の秘伝ともいふべき如何代の尤
なれハこれハいかもさうかいてゐる節乃をうち
ゆと家三ツの道ハ風人ものきといふものしれハ
此三冊ハ秘伝の書なり道ハ絶なかをを
嘉永後三十年ハいさしら原半三千ハ言れ
ものの名のとく後三十年ハ嘉のゝ発ハ和ぬ
ちうは半ゐ〻ハ出ををはるなハ玉ゆくはのの
とく函底ちのうた　のこ　て道のるまも

なるべきを以て八今年稚よりもむるまゝ
ちりし文の中なられハ五車の書籍乃至諸
形く新撰の板中小とゝのゝされハ日と暮の
望うゝ筆をとるたんとゝのゝれハ
二伏の長すれ初秋の涼しき来ればおりむき
而已を加く遠るものるりそうゝ

安永己酉中

宝化房

蘭更

ゝゝさゝゝ

俳諧を家之家八天地開闢の時より生有陰神陽神殿駆庁
婚に天下生てまつめかを喜哉遇可羨少女と乃ゝ陽神八
喜哉遇可羨少女とゝ形くゝ形ゝ先八家とゝもるゝれるも
ゝ世ふゝ詞ゝ也ゝ家ゝ故ゝ先を家れ始と生ると之神代ゝ
文字宣ゝ長人の世ゝ為てさのをゝ生るゝ乃ゝ三十一字ゝ家れる

八雲ゝ立出ゝ雲八重垣つゝこめゝ

やくゝ紀つゝるゝ乃八重垣

此家ゝ宣れる世ゝ和歌風ゝれハ和歌と云和歌ゝ連
歌ゝ俳諧ゝ俗語ゝ生連孔ハ白川の法皇の法代ゝ生歌の名有

世号は先ハ徳寺と云千句の数もはてまつる日京武名東
夷せんくうの下に吾妻の風波ゆて
新くうつくしをこそて幾秋くぬる
とあるしかれは
加賀なくて拾ヨハ九秋日ホハ十日よ
世尺姫しは堂の次伝ら是連歌の起とかとり業平世の
玉かつらの使の時ヨ舟交歩め人の口ことはぬ所なしあれ
と云上ヨ又逢坂乃関ハ誠なんその盗れ四のついまつの是し
て寄れ来我身付とかり
後白河の院時程の法師小林と云連歌差合ホの
法式の云伝まつ是本式ゆり聯句法立之是より形式あり
俳諧と云ハ貴門宗家々の云利口之物とはなひきたるかまくしム
那きこのよくを付物つくぬるものよ知ひとせ利口しくる雅之
韻学大成ホ鄭祭詩語多俳諧俳ヨ戯之諧ハ和也唐よたハ
和ヨて俳ら詩を俳諧と云又滑稽と云有滑稽管仲
楚人答ゆ本紀ヨ一休和尚ある是ホハ人ヨ和尚ヨ答乃
毎乃上ホ知りていをる利口之古今集ヨ入れ家を俳諧
家と定む是ヨ那ちくて連歌のたくとく絃世ヨ俳諧の
連歌とくく
夫俳諧とてくゆきくまつて代々利口のをたたハれ先逆俗

よ諧を初め江中江戸難波の橋爺自出をとるひろく世上に廣
まへるも中分いうあるていまもこの詞をひろくかこの紀名之をうに
亡師芭蕉翁氏道に出て三十余年俳諧初て実成れり
師の俳諧は名をしれ名をてむしれ俳諧は此れ諧の俳
諧をさしは俳諧の名をてもあるは誠をあく代しひろく
拘移りあるも師も氏道に古人なりと云又故人
の俗をそれは求るにやもしれ今おりふ処の流も氏後行をれ
出てをそれ我をたる来者を恐ると云く詞有むしれ
語奇は名ある人多しなその諧らもあく諧をたるあり故
師は誠なれりの誠を使へ永く世の先達と称る俳不

代と久しくなるて氏時俳諧に諧をたるの天正は氏人の後
をなるや師をいうあるる人を連俳連一之句世は連歌有俳諧
をいを連俳は波れも詞をを俳別てむしれは法仕
をなるは世有俳を言と云也は声を云詞新を俳言を連歌
をなる声のものあれも俳言の方を屋風に帳拍子律の
調子例あるぬ切断形と云れを句連歌は出る鬼女就
虎そのは千句のもの詞俳言を連歌は始へ詞の稚本花
梅雲の摩雪雪而小為門出猫人猫女の詞を言拍子を
拍巴の河書小みも数為へ作るう拍の歌を俳言を

名をよめてくおをてくをうをを女郎花

我為あきびと人あかつき船

此句俳正遍照さうの歴の蔵るの時より考る之俳諧のよ本
なり詞之〳〵かたくさんなるを上句〳〵詞いせ〳〵うんの
さんさるを下の句と思る之先師のいそく〳〵の俳諧句
雖然あるこなしもはめやうみ思ひ入て雖

おりふしてふ人のこゝろ〳〵に

立かくしてゐるらしもう船

空をゆく〳〵はるの淋のとらふと

なう恒よりて花ハ咲ける

又をく喜あの称ハ金雖連歌之面白〳〵を高を金く

俳諧之又月雨よりの浮巣をこよりくとりて白ハ詞之ふ
ふなり〳〵浮巣をこよゆんと云所俳之又素月や時のこゝく
双居てと云句よりあれ名月あるしなりとよ紙を仏
詞ともに俳〳〵なり句をうけて一首のてく仕ふ〳〵ふ
俳諧なり詞みをんて有其外その句此紙作をを有
信所一篇よりを〳〵〳〵〳〵
詩句連俳ハ句に風体之上三のりの八篇を所もそ句篇す
所と俳ハ〳〵〳〵と云所〳〵花よりの雪も解よ養をる緑
の先とまて〳〵正月もなり〳〵きの比をえとあ又水よ作句題を
高花よりふ込水の音とひとあ〳〵て学にあしるゆよを

誹のことゝる事に俳諧をせんにはまづ付句なるべし句とは発句ハ勿論俳諧の誹諧の俳諧の式のもハ連句式
より習て先達の教法をもちゐる連句より形式を追加りん
二條良基摂政作之今案ハ一条禅閤の作この三ツを一紙と
したるハ宵柳乃作と連よりと数ある抱ハ四とし七句去
りのハ又句とし万俳諧ありハもをもくはしくしるす
今案の追加ハ漢和の法をもを大抵俳諧の法とむりよを
立るゝ真法の発合の書そのかたの出世にあしそのもの
をやくハ師信用をさしと云りその中に俳を言とゝ有
大抵よろしと云る発合のもも多くてハ調ふ

師の門よりの一出のれりしとゝハ甚つく法を垂
ちもハ重記ものされとも是れりとをといそを名あれも
ま法しそれしてハ名の詮るし代に河まさわ仏と
人用ひれハ何とかなるや法を出して私よ発を守れとハ
勿りしきホ人発合のもハ明空みもよるし発ハ大ように
して宜しとたゝこて諸さしある門先ハ亜ホ使して信用し
て学ぶるりの密ハ口入門の法ともれさハ方法しし
悪のるを先師云ひりしよりを二句結されハ二用とむりれ
句ハ悪の詞を発句集メ亜その詞をつゝ亜句とるしてこの
真れ誠ををハさるこいまもふ亜ハ真別ら大切のもこれ形をもや

をそらしたるそのかたと宗祇の句をとりて此の例をもて
句をしたる後世門人も法にして一句ずつもをそれさるものなん
なりと之又ある時云ひあ句をそれとも所付かたに句を
附る必ずの句を付てあ句の句ともに然にたりとそれは
句をかたてつくる歌もあるべし新式は已に沙汰あるべし
去りしも歌の句八分てを座の宗匠に任せしとそれ旅の
ある俳諧の句連歌に旅の句三句つゞきの句無しと
多くゆるしは神祇天養無常の句旅ものとゆるし
今旅無雑所ありて又一句一式所ゆる旅雑の句八分四
会ありてもるともを旅ゆるしてあ旅を越へ旅の門無ものるべし

邪の俳諧ものと外をとをへしとは連の教えとあり又旅
あはあの一部も云ふべき人則教不定朱那しとも云ふと有
外旅を用ゆる新式ゆる云ふ新古今已来の作者を用ゆる
八代集八古今後撰拾遺後拾遺金葉詞花千載新古今也
之後土御門依勅新勅撰後撰二代を加へて十代集歌
外ゆるまれる又堀川院の作者の外八十代の外の集ゆ
もたとひ集無つぬあるとも他ゆれ珍味なるとゝ
又新式はいとく人のあまたくさるものを八付合ゆ是を始
如へゆるはゆるゆるり沙汰ゆ八仁用古一しとゝ
外ゆゆ沙汰ゆ是別あり本ゆゆゆとして八古今の沙汰を

会一作るをいふ俗会と八所遠国或ハ一句余情又名所後
会うる句を付るをいふく俗会ハ八所の集まりてもてきるゆえ
輪廻のくり返云ふ意といふ句に付てまさ社参を付へか
らず毋まて付へしまたくとてよ字かゝる流と爰にいふ句に面影と
付て名花を付ず半面影のことをて代ふ付ふ云ふ理なり
ふ蹠之又たとへハ差といふ句に風ふ雨ふ付て又ふて付ふ
数句を重ねるといふも一座まて蹠之化性之又付ふ句に世
と付て又汗ふる時夜の字ふ付へめ此の扨を掌廻へ有しと
云ふ山と付次ふ富士和と付ハ扨て那て打越へ掌るふり色城
蹠他性之一意の内似ふる句蹠之なり是を掌廻へ木扨の

ふ句ふ云へ蹠之ふ俗原のいまく代の句ふり変ふ句ふ変ふ
句ふ面影ふ変ふ句ふ変ぬりのごとく思ひ別て性へしふ句ふ句に
陸ふ他の句ある時ふ必ずふ句ふ月ふ一数句ふ表ふ裏ふ
句ふ二句ふ句ふ句ふ云へしとハ云ふ云ふ大抵のりて木扨ふ句ふ扨
へしふ句ふ連歌ふ云ふ方にちふ云ふ意ふ云ふ句て山風
や枝ふ花ふ送ふ人ふ意ふこの句山風の枝ふ花ふ送ふ
て全ふ生ふ生ふ舟ふ句同ふの連歌ふ俗ふ蹠ふ
ふ意ふ又いふく

扨ふハ意ふ意ふ意ふ生ふ一ふ句ふ

秋風ふ吹ぬく白河の関

都ゆはてしと言葉ゆゑ正しくも
もみちちりそめく白川の南
武家の支師のいとくゝあり〳〵うつ色とりたるはさこう
ちりて水れのうれしと云ふなるべし〳〵今師の心よ
ひ後のこと外月比はと出て十月よ及ひ白川まとり記録
のうちを抜きて前の能因法師はと云ひ出し所
その所の姿を感深きことと云ふう詠る所なるへし先
出て水れらくれたりと云ふ切字の中師のいとくむすしよりも
用ひ来る文字も用〳〵連俳の出よ要くあるすく切字なく
てはかなはれぬこの句はれ辨之切字を加へくも付句れ
安あるの句ひり後よ切るる句にあ〳〵又切字なくても切
句有を分別切字の月一之その位八月位と云しれ八志
ろ〳〵〳〵程は侍あ星師考はを大切ふして示れ之
あとくそのこれを主れ梅の花と云句をして切字をなるす
を来〳〵られ〳〵清よ所りて此句八切字なくて切るをうて詰
ものと云八切るこ云れしよる切字をたしうた大るるう後人の
人乃道のまとひ毋後てあ〳〵つねよ法くしもへしまして
りるるもなき句を云ひやむしも考こたしなむ
一一出示されしと之
文章のまま師れいとく熱名と文章ようつ之序よ由序来

序内序とて二体あり西八新るゝ〜と事来八先より先
のゝを序内八その古の内れるゆを古之体とひとは
て序一なるも序るゝ跋を跋とて序あつく跋あつく序
も跋もその古正同し〜跋八序を跋委〜く云る物之ぬゝ
とゆりて委しく出る仙之序跋ゝゆに序号自を云又字
七字云八老子の結之七五言形と北の詞九不云あるひを
対あり附を必対を亟ゝ古ゝゆを亟附八古ゝゆ対跋山水
意生新ホ古のゝ対同ゝ之詞古ゝの古結新なあひ
漢ホ八ゝ後もあ合ゆゝ記八ゝ結を記ゝの仙之格八序
跋ゝ同一ゝの遠のゝ結ゝあゝ同一ゝ北遠のゝ賛八ゝ

のゝ之即山吹ゝ句を出る時八山吹をゝ色て賛之山吹を
褒義の義理之ゆる又ゝゆ古附四文字ゝ云大ゝの格之
句合判のゆ序義判と云ゝ連中の打書詮俗抵判書
を之蛙合八序義判の格之故ゝ判者も志ゝ形〜ゝ人判
とゝふ附ゝ形者奥ゝ跋ホても又序ホても半ゝ句引
まても付る之ゝに句合ゝ序の新ゝ出ゝ判もあり跋
序の判八古ゝゆ又意を立て判ゝ行ゝ雑陳あつく
判者ゝを半ゝ小を加ゝ〜跋判を半ゝ巻跋ゝ多く
ゝ持のゝの之

懐紙のゆ八百韵ホ式之五十韵ゝ仙ゝ乱畧ゝ連孔

の古式ハ表十句各篇の表六句目七句去花裏表ヨリ
究表の内名所必一ヨ今も清水連哥をはじめしとかり
師のいとく古法表十句の例をもて八句ハ後二句ヨリ
表ヨリ始ムるの歌連歌に今にせを倣ヨハ人くしかれ連
哥に就虎鬼女さし出る歌表の内猿俳諧ハ鬼女ハ
形りくさし就虎ハ人くしかれそのか人を数を切るもの
なとハ歌ハ用捨をしし而韵一正ヨ迄へうれと師の云こ
又歌の詞述懐の歌祝言に云る句ハ表の内いそ作ん
とたつる時師のいとく句にヨリ文字ハ人くしかれ
祝言よいひるをしこ人のうに云ちいよく述懐之花のさひ

しの歌をくしかれ家しなる夕貌ちく金乃笑
家を移を句ハ用捨をしし他人の句ハとるをしこ又彩
を出を外婦ハ古の年祝を下句ヨリて表ヨリ書くさ
又化物のうにより用ひる形と句の歌いそ作ん云ハ師乃
いとく大形ハ表ヨリ婦ハしにもよるをきるかいつれと
てもの婦之詞ハ出をしして仏の下に婦ものを持るハ
他者清かれかきる形しに一向ようちもて云るる能
しにけるる表の歌ヨあるさ歌ハ考ヨくしかれうちもせ
ミるあハあれと云至又古今の人の名表ヨもをもいく作
人くうるをしに師の云今世人乃名をてしむへし古人

の名ハあるようてくるしかるべしさしもあるまじく思
と云て懐紙に歌を書くていくしのむすしあるとのはし
書なくて歌ハさるべき好ものハいと多と云ハしるべハ知て
大切のものと懐紙に歌を用るべ神代よりおなじ
書の例と思ふくてハ詮なきものとつしむべしと
師のいくたとへハ仙ハ三十六歌三一歌もおとに聞る心
なしと知るべきの改ハたく先人ハ仙たるれハ歌句
ものハ一座者の沈るれハ初句の者を云ハ一ハ云ハ初句
ものハ法を句ものも言く位よりし知を言しとむしるべ
云侍る先師を懐紙のかを句かるをを好れしと時代ものもるべき

ものよりやはり人又古来より初宅の舎に燈る燈を炉
追悔よりて紀乃遠ふ罪とが船中に聞る声も涙風かな
知いむ〳〵きの山雲ひとへ又群ふ具の嘗一座よ若舎のものしめて
声へしを句のこに所を山ある〳〵拾を亭主のなす
事おしよりの云おられるも芭蕉ふもよるべし客か句
とてむしろハ必客よりの挨拶并に句を初を拾も答
ものにうけて挨拶を付侍るべ師のいくく拾亭主ハ句成
云る所多挨拶之事自花のものハ云る句少てもあい
ものの心とのの教とか句に三月よ侍る京和ものるハ時ハ乾
ものて菊季を定むへしを連歌の名之俗ものもさ山者八

之師のいふく句に補足人数を分一更ひるの時ハ庭して
紙をくーたくゝ詞よもさんとも句ハあるくし但水流ふる
季一更ひるにして云句を紙ひ紙あくしたる句
み依ーー對付遠付ふらふ添ハ留の紙むしーふる云歌ふく
師云歌一ふ句をうあてつりあひ歌ふふふ添て付る
ふーー句中に低をぬるもあるくし留ハ文字をハ上
宜をくーかふ留メ自然よある句ハ口決あり歌一意対合体
のくとなりふくーー低ふくきハ先ふ句ものとふく歌
ふ発させるもあるとも低ふより念をあるくふやふ
挨拶してふくもあせて紙をくーくふかされハ多ふして

句下ふるもあるたくハ連歌のふ句ハ聯句ハ唱句之掘句對之
此格をいて文字留之詩聯句に習て韵とふふ歌ハ三ハ師の四
大付みても特ーて考るくをくしとなふふ成ふ留りの
るふふーー但ふ宗祇ふれ括式之考用る通ふふ
疑の切字ハふ句乃時を歌ハ之字字にとめふとふ古来云り
ふふふの句二句ふ歌ハふふふふの字なり句中ふ
押一字あとやかいつ付ふふふの紙之又句ふよりて押字ふく
てふるあり一字ふるふくをくんちくんの紙之ふ留りふ句
の歌之ふて留メせんとむくしふり云り之治定の歌ふふ
ふ之花のちふふ月ハ光ふの紙之盛りあてひふりあて

といふかゝふ之先師のいとくみてになるゝ小冊メてしかれ
ども冊ハ始ふへしとゝ[illegible]ふ文字冊を示蒙冊自然ことわり
古法に倣有ゆ之一説古書こゝろハ根の句韻字冊り也へ
臨命小文字冊りなゝバさるゆしに冊之為掘を示蒙えて
冊ハ分之文字冊小て冊るとも之をかくせゆゑを迷人ゑ
ゆゑ冊の冊をよゝしとを芭蕉乃冊之分之ハ相ゆる成ゆ
とゝ[illegible]とも掘の句によるゝ遠付れ和し付ゆの句ハ付
ゆゑ分之ゆて相ゆるにおよハさるゆなゝ句ゆ補祇
ゆのゆのゆて掘を之に疑ゆる付分之にゆり必を相し
とゝ[illegible]れゝゝゝ[illegible]師の説ゝ四句めハゆゝしより四句めゆる

と云て中をくかるゝきをよゝしゝ[illegible]師のゝゝゝ[illegible]ハ四句目
の体ゑ句ゝ[illegible]掘ゑひとゝし句中に仏をせんとゝ[illegible]説
和と始ふゆ之妻秋の妻つゝきに句目ゑて花月の句を去る
ゆ必あゝ体ゝとの師説せゑ句めゆ七句めゆ[illegible]ゑて[illegible]説ゑて
古説ゆゑ七句めも同ゝ[illegible]之分之の後一帙上の句を去ゝ
中ゆも月の座ハ名ゆる而之老分に冊ゝ同字を衰ゑ始ふ
も懐紙をたゝ形式而之して冊ゝゝ字冊ハ句ゆ一体衰道
具ゝ之裏ゑ来て四妻ハ木と連れり古説ゆり四句め妻を
せん八句めゑ言ゝ人物せん花ゑつゝ句体を表之俳諧も
[illegible]之他の句を返ゝに[illegible]ふ及妻出ハ花を付ゝ[illegible]

おし花とあるは花の名句なり秋の字用ひがたし
花をひつゝきわさと連歌は秘して句よりつゞむと
之俗言なれ共句の実体をこわれる事師のいふ通
より内は八あるべうれ無ゐ也つゝく八少の無ゐも
宗仙八人々かるゝ墨の物なる自の在所此字有時も先
今る時を実名あて書くし実名の仕ると人々の花をよあるべ
しと師の詞之又師のいふく身八上句勝たるべし歳月を
身の句つゝしむ一時よりべし法は八あれと之を月夜
八秋ゐて賞の身ゐ八あれをゝ句に出る時八十秋は
他季ゐて者時なをとまるべ身といふ字にゐ句師と社式

又師の白表は月二ツ稀は有此時八身数八つゝ名の裏八
まれなる自ゐしとゝ花のるゝ八花に本の内下に句八句ゝ
宣在まれゐもてかれる形しとゝ賞者の句者句への付ゝ
又その一句のゝ実八梅菊牡丹形と下ゝにして仕立正花
あるしゝる句その本ゐにちゝうひ季を持ゝ(ゝ)ゝ或八
正月は花をるまゝ九月に花咲なると云句いゝと云八師の白
九月ゝ花咲なゝいふ句八非云之形きるべゝたゝく名本成
据して花と外云ゝも正花ゝ花ゝゝ八梅のゝゝるゝ形る
裏花をいゝをゐを正花ゐせしして八花の句名く出る賞
雅しゝ宗祇の時代を百韵花之本之雨一つゝ宗也の時

よてゝう白ひの花一ヶ所一ツ軒許を隔り交合奏風せり
是て花四ヶ所二ツ宛ゝ宛り結る連奇の式と除の詞と
裏一叶の句も初のごとくかろ〳〵とあるべし句なりを追ふ
ものゝ及ばゝ揚句八付さるよしと古説を今一句まで来る
一座無芸なるなれまゝ是て東し一座ともいかゝ句主等な
亭主のまるあるよあれ初の一叶は執筆れ句取くハ揚句成
筆は是〳〵ヶ所句ある文字をつくしむとゝ四ほひの花まて
裏表ふ句に到るとも揚句に季をとれ〳〵たゝ季
云句に及ても是〳〵いつまの季迄ても揚句ひ
ちり合ものゝ少れ有一し